

## 1 学校と教会

今日は私たちの教会ではキリスト教学校の日と定めてキリスト教の学校で学んでいる学生・生徒さんと一緒に礼拝をささげたいと願っています。またこの礼拝につづいて(昼どき)コンサートを開催し、音楽に耳を傾け、いろいろの交流ができることを期待しています。

仙台には幼稚園から大学までプロテスタント、カトリックたくさんさんのキリスト教の学校があります。同じぐらいの日本の都市ではこれは多いほうで、こうした学校の働きは仙台というこの町に根つき、今ではなくてならないものになっています。学校の働きと教会と協力し合っていきたいというのが私たちの願いです。

キリスト教学校と一般の学校の違いは、いろいろ挙げられるでしょうけれど、形の上では学校の行事(入学式や卒業式)がキリスト教式でおこなわれたり、聖書の授業があったり、何よりも学校礼拝があるというところでしょうか。そしてそれによって校風や伝統がつくられているわけです。生徒の皆さんに直接関係するのは毎日の礼拝と聖書の授業の二つだと思います。

この三月まで私もキリスト教の大学(東北学院)にいたので分かりますが、キリスト教の授業、まして礼拝は残念ながら人気がありません。キリスト教教育を受けたくて入ってくる人もわずかです。

中高の場合だと聖書の授業は受験にも直接の関係はないし、体育のように体を動かすわけでもないし、どうやって勉強したらよいか分からない面もあり、その意味ではどこでも生徒さんも、それ以上に先生も苦労しています。

しかしこれは先生方が経験していることですが、学校生活の中で少しずつ関心をもつ生徒も現れ増えていきます。そういう中で、先生たちは、授業で話すことや聖書の言葉が少しでも心に残ってくればいいと思いい、福音の種が根づいて、芽を出し、やがて生長していくことを願っているわけです。いっどこで花が咲くか分からない。神の御心によっていつどのような出会いがあるかも分からないのです。

これまで私自身何回も経験したことです。同窓会や卒業生の会などに行くと、よく聞くのは、学校時代は聖書の授業は面白くなかった、チャペルの礼拝も行くことは少なかったけど(大学は基本的に自由参加です)、卒業して何年もしてから、今は一番なつかしいのは礼拝だとか、讃美歌をうたったことだなんて言ってくれる人があります。それは本当のことだと思います。

またいろんな教会に呼ばれて行くと、そこで東北学院だけでなく、尚綱学院や、宮城学院の、要するに在仙のキリスト教学校の出身者にほとんど必ずといってよいほどお会いします。待っていてくれます。何年前か前、長崎の長崎古町教会で宮城学院の出身のお年寄りの方に会ったと思ったら、同じ頃、山梨(甲府中央教会)や千葉(新松戸教会)の教会でもそういう方にお会いし、嬉しかった記憶があります。知らない土地でそういう人と会うことは嬉しいですね。キリスト教学校の力を感じる時です。キリ

スト教教育はほんとに息の長い営みで、すぐに結果が出るというものでもない。今日のような礼拝の機会をつづけて行きたいものです。現役の生徒さんは得がたい経験をしているわけですからがんばってほしいと思います。やれることがあれば私たちも協力を惜しみません。

## 2 タレントを生かし、用いる

キリスト教、あるいは聖書の授業、また礼拝で一番の中心はキリストであり、その父である神です。この神について、神は愛である、恵みに満ちておられる、ということとを聞き、学んでいると思います。

ところが今日の聖書箇所、イエス様の譬え話ですが、その後半、終わりのところで一タラントンを与えられていた人が、隠しておいた土の中から掘り出し、主人にお返ししたところ、ずいぶん怒られている場面が出てきます。最後は、彼が気づかずにタラントンは他の人を豊かにするために取り上げられて、主人の家から追い出されてしまいます。こうならないようにという警告だと思えますが、それにしてもかなりきびしい、神はいわば裁きの神として登場しています。

神は愛なのに、どうしてこんなにきびしいのか、どうしてこんなに怒るのかということとです。これから私が言うことはもしかしたら詭弁というか、もっともらしいこじつけに聞こえるかも知れませんが、じつは本当に愛しているからきびしいんです。愛と裁き、愛ときびしさは表裏の関係です。愛だけの愛は本当の愛ではなく、無関心や甘やかしである場合があります。聖書には神は私たちの真の父であるがゆえに子である私たちを鍛えてくださるという言葉があります（ヘブライ12章5-6節）。ですから神がきびしい一面を見せているとしても、それは神の愛が深いからです。きびしいけれども、愛に満ちた神、私たちを受け入れ、私たちと共に歩まれる神、これが聖書の神です。

さてそのことをふまえた上で、一タラントンをあずかった人のことをもうちょっと知るために、悪い見本、反面教師かもしれませんが、彼からも学ぶために、イエスの語った話を短く辿り直しておきます。

ある人が（これが主人）、旅行に出かけるので、長い旅行なのでしょう、三人の僕たちに、自分の財産をあずけて出て行ってしまいます。三人の僕、その一人には五タラントン、もう一人に、二タラントン、三人目の僕に一タラントンです。「力に応じて」（15節）預けたとありますが、商売する力のことだと思います。タラントンというのは昔から用いられた金、銀の重さの単位です。金額に換算すれば、一タラントンは数千万円に当たります。ですからあずけられたのは三人とも大金です。タラントンという言葉からタレントという、特別な才能や能力を意味する言葉ができて日本でもふつうに使われているわけです。五タラントンあずかった人と二タラントンあずかった人は早速出て行ってそれで商売しそれぞれ倍のもうけを出します。他方一タラントンあずけられた人はどうしたかというところ、それを地面を掘って主人の金を隠しておいたのです。

かなり日がたつて(19)、主人が帰ってきます。すぐに「精算を始めます」。あずけたお金があるかどうか、無事かどうか点検をしたというのではありません。どのくらいもうけたかを確認し、それもふくめて回収したのです。五タラントンあずかった人と二タラントンあずかった人は、自信をもって主人の前に進み出ます。彼らはその「忠実さ」と「良さ」のゆえに、「良さ」は有能さ、役に立つといってもいい、主人によって賞賛されます。問題は一タラントンを地中に隠しそれを取り出して持ってきた人です。彼についても「進み出て」(24)という前の二人と同じ言葉が使われていますので、彼としては自信をもって主人のところに戻ってきたのだと思います。商売をしてもうけようとしても損するリスクもあるわけで、五タラントンの僕も二タラントンの僕も成功したからいいけれど、自分は安全に管理し、なくさなかった、積極的に悪いことをしたおぼえはない、そんな思いで、彼は進み出た。これが主人によってきびしく叱責され、無一文にされた上「役に立たない僕」として「外の暗闇に」(30)放逐されてしまいます。「怠け者で悪い」などと散々なことを言われていますが、他の二人と比べてとくに劣っていたわけではない、違っていたのは、要するに、主人のために働くことをしなかった、自分の安泰や幸せを優先して、そうしたものを危険にさらすことをしなかった、それが問われたのです。

どうしてこんなふうになったのでしょうか。はじめからそういう人ではなかったと思うのですが。

一つの原因は、彼が主人のことを「恐ろしい」存在だと思っていたからだと思います。主人と僕の関係ですから、そう思ってもしかたがないのかも知れませんが、怖い存在だと思うと、こちらも気持ちがちこまってしまつて、失敗しないようにしようとしか考えなくなります。失敗を恐れずチャレンジしよう、失敗も受け入れてもらえらると思えば、積極的になりますね。つまり主人との信頼関係がなかったということだと思います。小心に、ただ安全をはかって、一タラントンを主人のために神様のために用いることをしなかったのです。それが期待されていたのに、しなかった、それが彼が叱られた理由です。

その背景には、もう一つのことがあったかも知れません。自分にあずけられたのが一タラントン、それを他の僕があずかったのと比べて、あくまで比べて、少なかったことと関係があると思います。一タラントンでもじつはものすごい大金なのに、彼にはそうは見えなかった、それがどんなにかありがたいことと思わなかった、それは人と比べたからです。五タラントン、二タラントンの僕のように、生かし、用いることができなかつた。そうしていたら、それはどんなにか大きなものになつて主人を喜ばすことができただでしょうか。

### 3 在ることの恵み

タラントン、つまりタレントですが、このイエスの譬えでは、それはお金です。しかし神様からあずかったものと考えれば、タラントンとは私たちが持っているもの全部といつてよいと思います。人間としてのさまざまな能力、いくばくかの富、許され

た時間、あらゆる種類の機会です（J・A・ベンゲル）。五タラントン、二タラントン、一タラントンと、これらを私たちは、まるで宿命的な不平等・不公平が神によってはじめから決められているかのようには理解しがちです。それは正しくない。そうではない。そうではなくて、五タラントン、二タラントン、一タラントンという違いは、それぞれ絶対的に違うものが与えられてことを指しているものです。私たちが、違う個性をもって、こうして在るということが神の賜物です。こうして生きているということそのことが神から貸し与えられているものです。

旧約聖書にヨブ記という書物があります。主人公はヨブという名の男性です。その地方随一の富豪で子どもも十人いました。しかも神を深く信じ、非の打ち所のない人でした。あるときこの子どもたちが、あるいは襲われ、あるいは火事で、あるいは嵐でみな死んでしまい、彼が持っていた羊やらくだ、牛など、そういうのが財産だったわけですが、たちまちなくなってしまうのです。それだけではありません。すべてをなくした上に彼自身ひどい皮膚病にかかるのです。かゆみのため瀬戸の破片でかきむしり、見る影もなくなるとヨブ記の最初のほうに書いてあります。神をのろい、神なんかいるものかと言いつつも不思議はなかったのです。ヨブは友人と対話し、自ら神に、どうしてという問いを投げかけます。その神が最後に口を開き彼に語りかけ、ヨブはそれを聞くうちに自分がとんでもない間違いを犯していることに気がつきません。人間の分際で神様に文句を言っているという自分の傲慢に気がつくのです。そうしたら少し見えてきました。自分の命よりも大切な子どもたちをみな失った。財産もみななくした、自分も皮膚病で苦しんでいる。でも自分はこうして生きている、生かされている、そこに神様の大変な恵みを発見したのです（ヨブ 38:11、参照）。

どうでしょうか。私たちは、あれもないこれもない、私は何と不幸なんだろう、ついでにないんだらうと嘆きます。でも、いまある賜物に目を向けることも大切なのではないでしょうか。あれもないこれもない、のではない。いっぱいある賜物に気がつかないこともある。ヨブは神と話をするうちにそのことに気がついた。それに気がついたとき彼はすべてを受け入れる気持ちになったのです。ヨブが生まれ変わったのはそこからです。

一タラントンの僕も、その一タラントンにおいて、神が私に豊かに恵みを与えてくださったことが分からなかった。いま在ることの恵みに気づかなかった。それが神を恐ろしい存在だと認識させ、他人の賜物をうらやむようにさせていた。たくさんのタレントを私たちはいただいています。タレントとは特殊な才能のことではない。どんなものも、そこには人間の愚かさも弱さも入り、神から与えられたものだと思え、とめれば、すべてがタレントです。神から与えられたから特別なのです。尚綱学院のスクール・モットーが「君の特別な賜物を見つけよ」(Find your best gifts. の私の訳)だということをおさつき前学院長の加藤正名さんから聞きました。私が知っていることも一言でいうとそうなります。在ることの恵み、在らしめられていることの恵み、この恵みが私たちの足下において私たちに支えます。それに支えられて、それにしっかりと立って歩んでいきましょう。

(2018年7月29日)